

## ■教育行政のポイント

### “国際教員調査(TALIS)”を読む

菱村 幸彦

“日本の教員、勤務時間が最長”——さる6月25日、こんなヘッドラインで教員に関する国際調査の結果が報道された。調査を行ったのはOECD。前期中等教育学校（中学校）における学習環境と教員の勤務環境に焦点を当てた国際教員指導環境調査(TALIS)である(注)。

#### 互いに学び合う日本の教員

我が国のメディアは、TALISの調査結果について、教員の勤務時間が調査参加国中で特に長い(週当たり日本53.9時間、参加国平均38.3)ことを中心に報道するものが多かった。が、調査項目は、(1)校長のリーダーシップ、(2)職能開発、(3)教員への評価とフィードバック、(4)指導実践、教員の信念、学級環境、(5)教員の自己効力感と仕事への満足度など多岐にわたっている(勤務時間調査は、上記項目(4)の調査の一部)。

各項目の調査結果は、それぞれに興味深い。が、詳細は文部科学省のホームページでご覧いただくこととして、ここでは一つだけ「職能開発」について取り上げたい。

職能開発とは、原文では professional development となっている。専門性の向上、つまり研修である。調査結果をみると、日本の学校は、他国に比べて、組織内指導者(メンター)による支援を受ける教員の割合が高い(日本33.2%、参加国平均12.8%)。また、「他の教員の授業を見学し感想を述べる」が、日本93.9%、参加国平均55.3%。「研修で他校の授業を見学する」が、日本51.4%、参加国平均19.0%となっている。

TALIS 調査から明らかになったことは、日本の教員は、▽校長やその他の教員からフィードバックを受けている割合が高い、▽教員間の授業見学や自己評価、生徒対象の授業アンケートなど多様な取組の実施割合が高い、▽その結果、指導実践の改善や仕

事の満足度、意欲等の面で好影響を得ていることである。我が国の教員は、校内研修で日頃から共に学び合って、指導の改善や意欲の向上につなげているのだ。

#### 外国で注目される“jugyō kenkyū”

日本の学校では、校内研修として「授業研究」が広く行われている。しかし、外国ではこうした研修は少ないようだ。で、いまアメリカ等では、日本の授業研究が教員の専門性向上の手法として注目されている。

授業研究は、英語で lesson study と訳しているが、そのまま jugyō kenkyū または kenkyū jugyō とも呼ばれている。グーグル検索で「lesson study」を入力すると、2千万件余がヒットする。その冒頭に出ている Wikipedia の解説では、「Lesson Study (or kenkyū jugyō) is a teaching improvement process that has origins in Japanese elementary education」と記述されている。

TALIS 調査の責任者であるシュライヒャーOECD 教育局長は、日本向けの発表記者会見で、日本の教員について「PISA 調査で最も良い結果を出しているのに、もっと学びたい、もっと力をつけたいと考えている」と絶賛したという(『THE PAGE』渡辺敦司)。

ただ、日本の教員は、研修参加への障壁として、業務スケジュールと合わないことを挙げる率が他国に比べて高い(日本86.4%、参加国平均50.6%)。日本の教員は、勤務時間が長く、多忙過ぎて研修参加が困難となっているのだ。教員の長時間勤務の改善は、教育行政の喫緊の課題である。

(注)Teaching and Learning International Survey. 2013年調査には34カ国の中学校の校長と教員が参加。各国200校、1校教員20人、校長1人を抽出が基本。日本は192校、3,713人が参加。

(ひしむら・ゆきひこ=国立教育政策研究所名誉所員)

●教育法規・制度のポイントを図と表で明示し、丁寧に解説！

## 『新訂第2版 図解・表解教育法規』

[著]坂田仰／黒川雅子／河内祥子／山田知代 B5判・280頁／定価(本体3,000円＋税)

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、無料FAX 0120-462-488をご利用ください(24時間受付・即日発送)